

「新たなスタートをきって」

宮崎県立小林秀峰高等学校 1年 横山瑞希

福祉を学んで分かったことがあります。それは、介護の仕事は人の生活を支える、大きな責任のある仕事だということ。そして、何よりもやりがいのある仕事だということです。

私は正直、これまで介護の仕事に就きたいと思ったことはありませんでした。ですから、小林秀峰高校に入学を希望した時は、別の学科を目指していました。しかし、希望は叶わず、福祉科に入学が決まり、私の高校生活は福祉科でスタートすることとなりました。そして現在、福祉科に入学して6ヶ月が過ぎます。この間の福祉科での学びは、私の福祉に対する考え方を大きく変えることとなりました。

福祉に関心がなかった私とは対照的に、私の二つ違いの姉は小学校の頃、障がいをもった友人との出会いを機に、福祉の仕事に就こうと考えていたそうです。「人の役に立つ仕事に就きたい」と早くから考えている。そんな姉を見て私は、「すごいな」と思っていました。

この夏私は、福祉科に入学して初めての4日間の介護実習を経験しました。この初めての実習は、4日間という短い期間であったにも関わらず、私は正直「長い」と感じていました。また、実習の事前指導が始まり、私の不安は募る一方でした。実際に実習がスタートし、1日目、2日目は大きな不安ばかりを感じていました。巡回指導に来られた先生に、「先生、私やっぱり福祉に向かないかもしれません」と言ったのも2日目だったように思います。しかし、3日目、4日目になると、私たち実習生に職員の方が「これやってみる？」「これをしてみて」と指示を下さり、実際に利用者の方のお手伝いをする機会を頂きました。入浴の外介助の見学中に、利用者の方の髪を乾かすお手伝いをさせて頂いたのです。その時でした。利用者の方に「ありがとう」という言葉をかけて頂き、今まで感じたことのなかった喜びで胸が一杯になりました。そして、介護の仕事が、大きなやりがいのある仕事であることを知りました。

この実習でもう一つ、分かったことがあります。施設に入所されておられる方は、自分の力だけではやりたいことがあってもそれを十分に行うことができない。それを十分になるよう支援するのが、介護福祉士なのだということです。実習中、トイレ介助を見学していた時のことでした。ある利用者の方が、私に「こんな姿を見せてごめんね」とおっしゃいました。私はその時、「謝ってなんか欲しくない」と思いました。自分が好んで介助が必要な状態になっている訳ではないのに。自分が、好んで施設に入所されたのではないかもしれないのに。など色々な思いが頭の中を巡りました。そして、同時に私の心の中に人の役に立ちたいという強い思いがわいてきたのです。

この夏の4日間の介護実習は、自分の将来の仕事として考えもしていなかった介護の仕事を、私自身の将来の目標へと変えてくれました。私をこのような気持ちに変えてくれた利用者の方々には、本当に感謝しています。

そして、もう一つ感謝したいのは、共に学んでいる福祉科のクラスのみんなです。クラス全体が本当に仲がよく、お互いを大事にして学校生活を送っています。共に福祉を学んでいるこのクラスを私は誇りに思っています。そして、このクラスでなら同じ目標に向かって3年間頑張っていけると確信しています。

私が福祉を学び始めて思ったこと、感じたことは、まだまだほんの少しだと思います。これから多くのことを経験し、感じ、悩み、壁にぶつかることもあると思います。しかし、それでも私のスタートはこれからです。

早くから福祉を志していた姉は、現在高原高校の福祉科の3年生です。私は小林秀峰高校福祉科の1年生。スタートは違いましたが、気づけば同じ目標を目指す者同士になっていました。

私の福祉科での学びは、このように新たなスタートを切りました。そして、今は小林秀峰高校福祉科の一期生として入学できて、本当によかったと思っています。今後は今まで以上に勉強を重ね、将来誰にでも信頼される人にそして、信頼される介護福祉士になれるよう精一杯努力し、前に進んでいきます。